

キリシタン時代の天草

東光博英

熊本県の天草地方はかつて5人の領主に割拠されていた。その中で志岐氏が1566年、最初にキリスト教宣教師を招いて受洗したのに続き、最有力者の天草氏も熱心な信者になったことから領内にキリスト教が広まった。88年以降はキリシタン大名小西行長が全域を支配したので、天草はキリシタンの一大中心地となった。それほどキリスト教が栄えたにもかかわらず、今日その史跡や遺物はきわめて少ない。ただしこれは天草・島原の乱以後の幕府によるキリスト教弾圧が徹底的かつ苛酷に行われた結果に外ならない。そのため布教を行ったイエズス会の教会などの跡地がほとんど判らないとはいえ、当時その地域で東西文化史上、画期的な事が行われたのもまた事実である。これに関して重要な場所が二つある。一つは、下島南部の河浦町で、イエズス会文書にはCauachinoura (*Cartas de Iapão*) と記されている。ここには91年から97年までイエズス会のコレジオ（高等教育機関）が置かれていた。90年に天正遣欧使節がヨーロッパから持ち帰った活字印刷機が同所に移され、「ドチリナキリシタン」、「イソップ物語」、「平家物語」、「ラテン・ポルトガル・日本語対訳辞典」など、宗教書のみならず西洋・日本文学、語学に関する書物がラテン文字や漢字仮名文字で出版された。長崎でも様々な出版が行われ、これらは教育施設で用いる教材であったが、現代では「キリシタン版」として知られ、世界的な稀覯書であるほか学術的な価値も有する。殊に日本初の翻訳文学である「イソップ物語」が天草で刊行されたことは特筆に値する。もう一つの重要地は下島の北西に位置する志岐(Xiqui, *Ibid.*)である。イエズス会はこの拠点に90年代、イタリア人宣教師ニコラオを指導者として画学舎を開いた。そこでは西洋画や銅版画が日本人に教授されただけでなく、オルガン等の洋楽器や時計も製作された。記録によれば、竹筒を用いてオルガンが製作され、その音色は西欧製のものに勝るとも劣らなかつたという。今、河浦町の「天草コレジオ館」に復元した竹のオルガンがある。オルガン背面の板状のふいごを動か

しながら鍵盤を押すと柔らかな音を奏で、往時に誘うかのようなものである。また、志岐は歴史的にも興味深い。それは宣教師たちの中に、志岐を占領して要塞となし、軍事力によって豊臣秀吉に対抗しようとする者がいたからである。1587年、秀吉が「伴天連追放令」を発してキリスト教の禁止と宣教師の国外退去を命じたことにより、宣教師らは島原や天草などキリシタン大名の領内に潜伏せざるを得なくなった。その上、80年以來彼らが支配し要塞化に努めてきた長崎も没収された。そこで武力に訴えて日本教会の危機を打開しようと考えたのである。とりわけクルス神父は、99年イエズス会総長宛書簡の中で、そのための基地として「天草島の志岐が非常に適している。なぜならその島は小さく、軽快な船でそこを取り囲んで守るのが容易であり、また艦隊の航海にとって格好な位置にある」（高瀬弘一郎『イエズス会と日本1』）と説く。なぜ志岐に目をつけたのかは現地^かに立ってみればわかる。志岐の町（現・苓北町）には小さな富岡半島があり、その実態は砂州で陸につながった島である。島の直径は東西2.5km、南北2km程で三方を海に囲まれた小山の観を呈しており、その懐に古くからの良港を抱く。攻め難い天然の要害にしてまさにポルトガル人好みの地形と言える。彼らが根拠地にしたマカオや長崎も同じであり、前者は中国大陸と細い地峡で結ばれた半島をなし、後者もその名の通り湾内に突き出た長い岬であった。恐らく志岐とは富岡のことであろう。1602年頃に寺沢広高が島に築いた富岡城は、実際に天草・島原の乱の時、一揆軍の猛攻にも陥落しなかつたことを思えば、ポルトガル人が要塞を置いて軍船と大砲で守りを固めていたなら、秀吉にとってはそれなりの脅威になったかも知れない。結局、武力に依らざれば日本のキリスト教国化はないという過激な宣教師らの企ては実現しなかつた。現在の富岡半島にその事実を語るものはなく、むしろ天草は乱の総大将、天草四郎一色に染められた感がある。しかし、その前史となるキリスト教が広まりその文化が花開いた時代と、その後の崎津の美しい教会に象徴される潜伏キリシタンの時代にわたる天草の歩みは正しく日欧交渉の歴史そのものである。

とうこう ひろひで

（非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史）